
I S ～ZEROの翼～

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ～ZEROの翼～

【Nコード】

N4690R

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

ゼロシステムを搭載したISを駆る少年の未来とは……

注1 三点リーダーを使っているため、見ずらい場合があります。それ関係の苦情は受け付けます。

注2 作者の妄想で書かれています。

注3 「束は俺の嫁」という方は、即バックボタンを押すことを推

奨めます。

プロローグ

プロローグ

IS。正式名称「インフィニット・ストラトス」。“天才”篠ノ乃束が作った宇宙空間での運用を想定したマルチフォーム・スーツである。

ISのコアは全部で467機作られたが、その後篠ノ乃束が失踪したためこれ以上のコアが作れず、このコアを取りあうことになった。が、アラスカ条約締結により各国のコアの数に制限が付いた。

これは「最強の機動兵器」だが、なぜか女性にしか動かせないため、各国は女性優遇の政策を次々と打ち出し、女尊男卑の社会が成り立ってしまった。

だが、男であるにも関わらずISを動かせる異例の男子、織斑一夏の出現により委員会は大いに騒いでいる。

……その異例がもう一人いることも知らずに…

0000 シュバルツバルト ドイツ黒林 とある研究施設内

“天井が吹っ飛んだ”研究室内でハッキングをかけて研究データを吸い出している一人の“少女”が居た。

「これでよし……束姉、どう？」

「『これで全部だよ。仕事早いねえ、さっすがりんちゃん！』」

「『そろそろやつこさんも気付く頃だ。帰ってこい』」

「了解、兄さん」

そう言うのと、“少女”は通信を終えて……

「導いて、ゼロ」

自分の愛機を展開した。

“少女”に変わってそこに現れたのは漆黒に身を包んだ、手に白い巨大な楯と非固定浮遊部位に砲身がないバズーカを装備した、漆黒の羽が特徴のIS。

その羽を羽ばたかせて上空に移動した後、楯の裏側にあるダイヤルを操作してバズーカの砲身を取りだし、その砲身をバズーカに接続。研究施設に狙いを定める。

「……任務…完了」

そう呟くと“少女”は引き金を引いた。

弾が発射され研究施設に着弾した瞬間、爆風と轟音が響き、施設は跡形も無く吹っ飛んだ。

“少女”は爆風を楯を使ってしのぎ、収まったのを確認したのち……

「ミラージュコロイド散布開始」

銀色の粒子を散布して、文字通りその空域から姿を消した。

5・00 太平洋沖 とある無人島 通称“アリスガーデン”

早朝の薄暗い中、漆黒のISが着陸した。

「……お帰り、鈴音」

“少女” 篠原鈴音に労いの言葉をかけるのは、薬指に指輪を付けている長身の成年。

「ただいま、兄さん」

鈴音はISを解除し、兄 篠原琴音に近づく。

「サイサリスの調子はどうだった？」

「合格。砲身が一発で駄目になったけど、威力は申し分なし」

「そうか。作った甲斐があったな」

琴音は顔をほころばせて喜んだ。が、すぐに表情を引き締める。

「鈴音、千冬から伝言。『IS学園に通わないか？』…だそうだ」

IS学園。日本国が資金を出しているIS操縦者を育てる教育機関。
先日、一夏が誤って入学した学校である。

鈴音はその言葉を聞き、顔をしかめた。

「……一夏の護衛？」

「それもあるが…同類が近くにいた方が、一夏の心が少しは落ち着くだろう」

「千冬姐、なにげにブラコンだしね。……明日行くよ。ゼロの補給よろしく」

「まかしとけ」

鈴音は琴音に愛機^{ゼロ}を渡すと、自分の部屋に向かった。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？感想まっています。

オリキャラ紹介

篠原鈴音

- ・性別 男
- ・年齢 15歳
- ・身長 シャルロットより少し高い
- ・瞳の色 緋色
- ・髪 黒髪 of セミロング
- ・特技 ハッキング
- ・能力 分割思考
- ・IS ゼロ
- ・主人公。

一夏と箒の幼馴染で、束が失踪した時に付いて行った“天才”の人。

女顔（けいおん！のあずにゃんをセミロングにした感じ）でしかも声変わりしていないためよく女と間違えられる。

頭は束に少し劣るが、その分プログラムの構築やハッキングが得意な“電子の魔術師”。装備関係の案を出すこともある。

なお、寝起き直後はネコモードになる。—（語尾に『にゃ』が付く）ゼロは右の人差し指に装着している。

・イメージCV 竹達彩奈

篠原琴音

- ・性別 男
- ・年齢 千冬の同期
- ・身長 175
- ・瞳の色 緋色

- ・髪 黒髪为天パ
- ・IS 適正無し
- ・鈴音の兄で、千冬と束の幼馴染の“天才”の一人。失踪中に束と結婚し、既婚者である。
- 束と同等の頭脳を持ち、装備関係の設計が得意な“技の天才”。装備関係の製作者で、鈴音がテストをしている。
- 束と夫婦初の共同作業でGNコアを開発した。

新装備開発の流れは、鈴音が装備の案を出し、琴音が開発して、微調整を鈴音が行う。この三段階で開発する。

オリキャラ紹介（後書き）

I Sの解説は後ほど。

オリIS紹介

IS ゼロ

- ・正式名称 ウイングゼロ
- ・待機状態 トルコ石がはめ込まれた黒い指輪
- ・束と琴音が鈴音の為に作り上げたISで、全身装甲ではない。そのスペックは「白式」や「紅椿」をも凌駕する。

コアにGNコアを二つ使っており、エネルギー切れはあり得ない。基本色は黒で、灰色が一部にある（イメージとしては、Wガンダム0—（EW版）の青い部分が灰色で、白い部分が黒）。非固定浮遊部位はダブルオークワンタの左肩に似ているものを両肩に装備しており—（色は黒）、さらに左腰に刀を差している。

腰回りと非固定浮遊部位と色を除けば、Wガンダム0—（EW版）に酷似。
アンロックユニット

なお、頭部ユニットはスカイガールズの桜野音羽が装備していたターミナルデヴァイスの黒版。

メール&収納機能付き。

・武装解説

・エピオン 左腰にマウントされる「次世代」の名を冠する日本刀。この刀に切れぬものはない—（絶対防御以外）。なお、刃をつぶした状態にすることも可能（模擬戦では絶対にそうする）。

・サイサリス 夜間強襲拠点破壊用パッケージ。これは宵闇にまぎれて拠点を跡形もなく消し飛ばすことをコンセプトにしている。装備すると色が漆黒に染まり、右側の非固定浮遊部位がアトミックバズーカに変わって、左手にバズーカの砲身が収まった白い巨大な楯が装備される。装備中は他の武装は使用できず、また砲身が安全

装置になっており連結しないとバズーカは使用できない。砲身は使い捨て。バズーカは核と銘打っているが、対消滅反応を利用しており核は使っていない。総弾数は一発。なお、接近戦用装備にGNビームサーベルを呼び出せる。元ネタはGPO2A

・機能解説

・ゼロシステム 名前の元となったシステム。未来を予測できるが機体に負荷がかかるため、合計で30分以上使用できず、30分経過すると強制解除される。使用中は視界が赤く染まり、タイマーが左上に表示される。そのとき鈴音の瞳のハイライトが消える。元ネタはWガンダム0のシステム。

・ミラージュシステム ミラージュコロイド粒子を散布させて、完璧なステルスを発生させる。ただし、発動中シールドは展開しない。元ネタはブリッツガンダム。

・ミラージュドライブ ミラージュコロイドを生成する機械。

・GNコア GN粒子を生産する半永久機関。元ネタは太陽炉。

・ツインコアシステム 二つのGNコアを同調させて、エネルギー生産量を二乗化するシステム。元ネタはダブルオーガンダム。

・単一能力 不明

オリIS紹介（後書き）

ISの装備は最新話で使用したら追加します。

第一話 転入初日（前書き）

原作介入です。

転入タイミングは、鈴が一夏に宣戦布告した日です。

第一話 転入初日

第一話

翌日 9:00 IS学園校門前

side 鈴音

「到着つと。はー、実際に見るとでかいな」

アリスガーデンを4時に出た私は、予定より3時間遅れてIS学園の校門前に立っています。

遅れた理由は………今は聞かないで、お願いだから。

「………待っていたぞ鈴音。転校初日に遅刻するとはどういうことだ？」

校門前に立っていたのは青筋が一本浮き出てる千冬姐。朝から御苦労なこと。

さてと、気は進まないけど話すしかないか。

「兄さんと束姉のイタズラですよ。ミラージュコロイドが散布出来なくて、おかげで国防相手に3時間追っかけまわされて………」

「あのサイレンはそれが原因か………まったくあの馬鹿コンビは」

同情してくれますか………ありがとうございます。

「まあ、それは置いて・・・時間が押している。歩きなから話そう。着いて来い」

「了解、千冬姐」

「それと学園内では織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

そう言えば絶賛遅刻中だったっけ。すっかり忘れてた。

というわけで千冬姐と一緒に歩き出す。なお、若干早歩きです。

「しかしお前、全然成長してないな。見てすぐに分かったぞ」

笑いながら千冬姐がそう言う。うゝ、なんで私の体は成長しないの？

「ほつといてください、自分でも気にしてるんですから・・・私のクラスは？」

「私が担任をしている1・1だ。織斑もそこにいる」

さすが千冬姐、身内相手にも名字呼びとはね。ちゃんと公私を分けてるんだ。

しかし一夏と同じクラスか・・・面白くなりそう♪ 主に女性関係で。

「・・・さて、ここだ。呼んだら入って来い」

「了解」

そう言われて廊下に立たされる。そして入口前に立っていた女の子に出席簿でバシーン！ と・・・って千冬姐？ 出席簿で叩いてどうしてそんな音が出るわけ？ 私はすっごく疑問なんですけど？ 叩かれた女の子は千冬姐を睨むが、迫力に押されてお隣の2組へすごすごと避難。

バシン！×4

そしてなお響く出席簿アタック。千冬姐、一発叩くと脳細胞が五千個減るって知ってます？ いや前言撤回、知っててもやるか。

「さて、篠原入って来い」

お。さーて、呼ばれたし行きますか。

「自己紹介を」

「篠原鈴音です。趣味は……パソコンかな。これからよろしくお願いします」

『お………女の子？』

「む、失礼な。私は男ですよ」

「こんな形なりをしているが男だ。私が保証する」

千冬姐、余計凹みますよそのフォロー。

って、おーおー、みんな驚いてる驚いてる。

『男の子！？』

「そうですよ」

『きゃ………』

あれ？なんか嫌な予感がする。

『きゃあああああー！ー！ー！ー！』

うおっ！？ うるさっ！！ なんで叫ばれた！？

「男子！ 二人目の男子！」

「日本人形みたいにかわいい！」

「地球に生まれて良かったー！ー！」

元気だねー、このクラス。そして最後の人、どこの織田雄二ですか？

「騒ぐな！ 静かにしろ！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

うわっ、凄い。リアル鶴の一声なんて初めて見た。そこまで怖いかな？ まあ千冬姐だからかな？ 私も姉さんじゃなくて姐さんだから。

「今は騒ぐな。質問は休み時間にしろ。篠原、お前は一番後ろの席だ。座れ」

「分かりました、織斑先生」

その後の休み時間は質問攻めに遭って全然落ち着けなかった。ほんと珍獣扱いだね。一夏に挨拶もできないし。てゆーか、精神的に限界。

放課後

「やっと終わった・・・・・・・・」

現在、机に突っ伏しています。いやー、普通に疲れた。

「・・・・・・・・おい、大丈夫か。すず」

「まったく、全然変わってなかったから逆に安心出来たぞ、鈴音」

この声は我が幼馴染の・・・・・・・・
体を起して前を見るとそこには・・・・・・・・

「・・・・・・・・なんとかね。なんで助けられないんだよ、一夏、
箒」

そこにいたのは男子と、ポニーテールの女子。
・・・・・・・・間違いない、幼馴染の織斑一夏と篠ノ之箒だ。

「いや、だって・・・・・・・・なあ」

「あの程度の状況など、楽勝では無かったか？」

たしかにいつもだったらパッシングスルー使って逃げれたんだけど・
・・・・・・・・

「無茶を言わないで。兄さんのイタズラでこっちは朝の5時半から
3時間、国防に追っかけまわされたんだよ？」

「そ、そうだったのか」

「・・・・・・・・お前、大変だったな。・・・・・・・・ああ、そ
うそう。千冬姉から伝言」

「・・・・・・・・何？」

「『部屋が決まったから、案内しろ』・・・と、言われた。ちなみ
に、1024号室だ」

「お隣さん、というわけだ。これから宜しくな、すず」

「・・・・・・・・ああ」

そのまま部屋へ直行してベッドに入ったらボタンキューでした。

・・・・・・こうして、私のIS学園での生活が始まった。

side out

同時刻 アリスガーデン

琴音と束は、鈴音が研究施設から盗んだデータを解凍していた。

「・・・・・・ふう、やっと終わった」

そう言ってキーボードを打つのを止める。ちなみに半日キーボード打ちっ放しでした。

「これがりんちゃんだったら、すぐに出来るんだけどね。うゝ、悔しい」

「しゃーないって、鈴音はこれが得意だからな。『ゲーム感覚で楽しい』・・・・・・って言ってたぜ」

琴音はそう言いながら、解凍したデータを展開する。

「そう思えるのはりんちゃんだけだよ・・・・・・」

束は呆れながらも展開されたデータをチェックする。

「・・・・・・！・・・・こーちゃん、これ！」

すると、一つのデータが目にとまった。
書かれていたのは・・・・・・

「・・・・・・・・おいおい、GNドライブの研究データかよ」

「束さんから見れば相当な不良品だけど・・・・・・・・伝えた方がいいよね？」

「ああ・・・・・・・・ゼロにメールと索敵プログラムを送っておこう。」

『紅椿』は？」

「ほーちゃんのデータをインストールすれば完成だよ。あとあと、『――』も、もうすぐ完成するよ」

琴音はそれを聞くとわずかに口角を上げた。

「後は、鈴音が恋人を見つけるだけ、か・・・・・・・・さて、やるか。まずは・・・・・・・・」

・・・・・・・・二人の夜は終わらない。

第一話 転入初日（後書き）

『――』は、ヒロインの新機体になります。
乞うご期待。

第二話 クラス対抗戦（前書き）

一気に話が飛びます&戦闘一瞬で終わります。

かなりの駄文です。

第二話 クラス対抗戦

第二話

雨降りしきる暗闇の中……

——父さん、母さん、私のことは良いから逃げて！

襲ってくる敵IS。父はISに撃たれて殺される。

——鈴音、幸せになりなさい……さよなら。

ISに乗って特攻する母。そして、爆発。

——うわあああああああつ！

響く慟哭。

side 鈴音

翌朝 5:00

「うにゃっ!？」

飛び起きると、知らない壁が目の前に……

……あ、そっか、IS学園に入学したんだっけ。

「はあ、はあ……嫌な夢にゃ」

見たのは、小学4年生の失踪する前日に起こった、私が力を求めたきっかけになった事件。そして、私の唯一のトラウマ。

ふと時計を見ると……

「……うにゃ、まだ5時かにゃ」

2度寝はしたくないし……屋上に上がって風にあたるか。

屋上

制服のまま寝てたから、テキトーに上着を着て屋上に上がった。

ちょうど日の出の時間で、風が心地よく私の火照った体を冷やしてく。

……うーん、良い朝だ。

ふと、ゼロを見ると……メール受信のマークが浮かび上がっていた
ここに入れるのは兄さんと束姉しかいない。しかも緊急時限定。

「ゼロ、頭部ユニット起動」

私は頭部ユニットを起動し、目の前にあった『mailer』のボタンを押す。

展開して出てきたのは本文と……

「データファイル？……なんだろう？」

気になりつつも本文を展開する。

文面は……

ファントム・タスク

『お前がこの前潰した亡国機業の研究場のデータの中に、GNドライブについての研究データがあった。今後、『T』として使う可能性が高い。

そのため、対GN粒子処置が施された索敵プログラムを送る。ISにインストールしてくれ。厳重なプロテクトが掛かっているが、お前なら楽勝だろう。

PS. 彼女が出来たら連絡しろ。至高の機体をその子に贈る
by 琴』

……彼女か。まあそれより今はプログラム。解錠しよう。そうしよう。♪

ちなみに解錠は30分で出来ました。

時は進んで五月。

授業は一度やったことの復習なので楽楽勝♪……授業中寝てないけどね。千冬姐の出席簿アタックが怖いから。

それで鈴ちゃんと意気投合しました。一夏、約束覚えていないのは最低だよ。

そんでもってクラス対抗戦開幕しました。今現在、一夏VS鈴ちゃ

んの試合。ピットで観戦しています。

そして今丁度、鈴ちゃんのIS『甲龍』が、一夏のIS『白式』を
ふっ飛ばしました。

「なんだあれは……？」

「『衝撃砲』ですね」

「空間を圧縮して砲身を形成。余剰で生じる衝撃自体を砲弾として
打ち出す」

「ブルー・ティアーズと同じ第三世代兵器ですわ」

箒のぼやきに、山田先生・私・セシリアの順で説明する。

そして試合は、一夏が『瞬間加速』を使ったところで……

ドカンッ！！

遮断シールドを打ち抜いたビームによって中断させられた。

突然の襲撃に私以外全員フリーズ。

「（やっぱり来たか亡国機業……よし、潰そう）」

思い立ったら即行動。私は急いで近くの客席の遮断シールド前まで
移動して……

「導いて、ゼロ！」

トルコ石がはめ込まれた指輪が灰色の粒子に分解され、私の体を包
みこんだ。それがはじけると私の愛機、ゼロが構築され装着された。
そして左腰の日本刀『エピオン』に手をかけて、抜刀の構えを取る。
それと同時に進行で敵の生体反応を確認する。……よし、無人だ。こ

れで本気を出せる。

『エピオン』で抜刀してシールドを切り裂き、『瞬間加速』を使い
つつ……

「code ZERO」

—ZERO system startup

ゼロシステムを起動する。その瞬間、私の視界は赤く染まった。

「一夏！鈴！そこを動くな！！」

side out

side 一夏

「全力も何もその攻撃自体が当たらないzy「一夏！鈴！そこを動
くな！！」……え！？」

突然の声に驚く俺たち。すると、奥のシールドが切り裂かれて、そ
こから……

「「すず（鈴音）！？」

黒いISを装着したすずが飛び出してきた。それで敵の懐に入り込
んだが、気付かれて異形の敵ISの右拳が迫る。

「！あぶな……！？」

それをすずはまるで、攻……撃……が……来……る……の……を……判……つ……て……い……た……か……の……よ……う……に……上……昇……し……
てかわした。そしてそのまま持っていた日本刀で……

キンッ!

甲高い金属音とともに敵ISを真っ二つにした。

side out

side 鈴音

ゴンッ! 「痛っ!?!」

えゝ、乱入者を速攻でぶっ潰したあと帰還して千冬姐に会った瞬間
拳骨を貰いました。……うう、なんで?

「馬鹿者、なぜ飛び出した?」

「その方が早く片付くからです」

キッパリ言う。だって事実だもん♪

ゴンッ!

……また殴られました(涙目)。

「だったら出撃許可を貰え。次はないぞ」

「はい……」

「えっと、あのゝ、織斑先生。さっきのは一体何なんですか?」

一夏、ナイス。

それを聞くと千冬姐は説明……

「機密事項だ。教えられん」

「そんな……」

「無理なものは無理だ」

…しないのね。まあ、ありがたいけど。

「まあそれはさておきお前……どうやって遮断シールドを突破した？」

「あ、切りました」

………沈黙——（一夏と鈴ちゃんは苦笑い）。あれ？　なんで？

「「切った!？」」

「そうですが何か？」

平然と言い放つ。ん？　どったの千冬姐？　呆れたような目で見て。

「……お前の刀はなんでも切れるのか？」

「絶対防御以外切れますよ」

即答で言う。すると千冬姐は疲れたような表情になった。え？　なんでなんで？

「………今日は私も疲れた。以上、解散」

とりあえず今回の事件の所為でクラス対抗戦が中止になったのは、言うまでもない。

第二話 クラス対抗戦（後書き）

鈴音の過去については、いつか書きます。

第三話 考察（前書き）

ヒロインはシャルに決定しました。
フラグとかどう立てようか？

第三話 考察

六月頭 日曜日 食堂 10…00

学園の外に出ても特にやることがない鈴音は、学園の食堂で遅めの朝食を取っていた。ちなみに服などの生活雑貨はゼロの中に仕舞っておいたので新たに買う必要はない。なお、メニューはトーストとベーコンエッグに、コーヒーの組み合わせだ。

「(……このコーヒーも結構おいしいね。丁度いい苦味と酸味だし。……しかし……)」

コーヒーを飲みながら考えに耽る。思考の対象は亡国機業のことである。

「(先月の襲撃者はGNドライブを使ってなかった。まだ『τ』はテスト段階と考えるべきなのかな?)」

GNドライブはGNコアを動力機関に変更した物で、半永久的にエネルギーを作り出すことができる。ただ、一個作るのにGNコアと同じくISコア100個分位の莫大な金が掛かるのが欠点。鈴音達は日本銀行にハッキングしてそこで金を手に入れたのである。……今頃は気付いて大騒ぎだろうが。

それを量産しようとするなら金が足りなくなる。そのため疑似GNドライブ『τ』を完成させるしかない。

これはGNドライブの劣化版でバッテリーが切れると動かなくなる。だが、それでも現行のISでは歯が立たなくなるし、費用はISコアの四分の一で済む。となると、こちらを使ってくる可能性が高い

「(となるt「♪ー。♪ー。」)…え？」

突然鳴るト音。…ゼロの着信音である。

鈴音はすぐに頭部ユニットを展開し、『mailler』を起動する。
メールの差出人は琴音。文面は…

『お前が提案した対AIC用の新兵器を【本】に入れて送っておい
た。

微調整頼む。

by 琴』

…である。

side 鈴音

そのデータを確認すると…

「(対AIC用散弾砲『オニキスローゼス』…さすが兄さん。構造は完璧に出来てる)」

えーと…とりあえずデータを貰って、撃って威力の確認。後は、
ラウラとの模擬戦データ使ってAICのテスト。それから…

ゴンッ！ 「痛っ!？」

これに夢中になっていると、急に頭部に強い衝撃。それと共に…

「何をしている。許可されていないISの勝手な展開は禁止されているはずだが？」

般若の声が聞こえてきました。うゝ、だって……

「ゼロじゃないと不思議からの機密情報が届かないんですよ。織斑先生」

不思議Ⅱアリスガーデンの隠語。私はそれと共に画面を千冬姐に見せる。

千冬姐はため息を吐きながら……

「ハア……本来ならグラウンドを十周させるところだが、それならしょうがない。次に来る男子の転校生の面倒を見ろ。それで勘弁してやる」

グラウンド十周って……殺す気ですか千冬姐。
……って、まって

「男子の転校生？」

「ああ、フランスからの代表候補生だそうだ」

この時期になんで？ ……まあ、いっか。考えてもしようがない。

「とにかくそう言うことだ。頼むぞ」

「……了解。……ああ、それと織斑先生」

「ん？ なんだ？」

「【本】が飛んできます」

「……ああ、分かった」

千冬姐が立ち去った後すぐにゼロを消して、朝食を急いで食べ終えた。

そして第三アリーナへ向かった。

第三アリーナ 12…00

「合流ポイントはここで良い筈……あった!」

アリーナに着いたらセファアが目の前にいました。相変わらず仕事早いね。
とりあえず近づいて呼びかける。

「HARO、来たよ」

「セツゾク、セツゾク」

「はいはい……分かってるよ」

セファアから伸びているケーブルをゼロと接続して、受信ボタンを押す。

「ソウシンチュウ、ソウシンチュウ」

5…20…77…100%——Complete.

「よし。HARO、ありがとう」

「キヲツケロヨ!」

……HAROからの応援を貰っちゃった。珍しいな。雨でも降るのかな?

「……さて、微調整と洒落込みますか!」

結果。

オニキスローゼスは性能的に問題なし。模擬戦でのAICCの動作も正常稼働を確認したけど、ふとミラージュシステムを使った奇襲攻撃を思いついて、寝ずにキーボードを叩いてプログラムを完成させました。まあ、ゼロシステム作った時なんて三日三晩徹夜したし、一日ぐらいの徹夜なんてもう慣れたから問題ないけど。

side out

第三話 考察(後書き)

最後が無茶苦茶・・・

ヴァルキリア様、感想ありがとうございます
これからも応援よろしくお願いします。

武装解説

・オニキスローゼス 追加武装のショットガンで、脚部にマウント可能。散弾状のエネルギー弾を撃ちだす。A I Cに対するジャミングが可能で、掠っただけでは効果はないが、しっかり当たるとA I Cを使用不能にする。元ネタはベヨネッタの武器。

第四話 再開

第四話

side 鈴音

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？ 私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子が賑やかに談笑していた。みんなカタログを持って、あれこれ意見を交換している。

「そういえば織斑君と篠原君のISスーツってどこのやつなの？ 見たことない型だけど」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

「私のはミューレイのストレートアームモデルの改造品。これが一番体に馴染むんだよね」

ちなみにISスーツがなくてもISは動かせる。でも反応速度に差が出るし、小型拳銃ぐらいなら防げる。

ちなみに私が言ったのは嘘。本当は兄さんと束姉の自作で、電位差情報の伝達速度が極限まで高めてある。理由は、そうしないとゼロシステムの示す未来についていけないから。

「みなさん、おはようございます」

そんな話をしていると、山田先生が笑顔で教室に入ってきた。

「あ、山ぴーだ」

「おはようございます……って、や、山ぴー？」

「おはよう、山ちゃん！」

「おはようございます……って、や、山ちゃん？」

転入してから大体二ヶ月ぐらいたった今日この頃。

山田先生には現在八つぐらい愛称がついていた。慕われている証拠か、はてまた反応を見て楽しんでいるのか。というか呼びづらくないかな？

「あのー、教師のあだ名で呼ぶのはちよつと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちよつと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

おろ？ 山田先生が声を荒げるなんて珍しいな。そのあだ名にトラウマでもあるのかな？

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？ わかりましたね？」

『はい』

……ただ返事をしているだけだね。山田先生のあだ名は今後も増え

る傾向にあり、まる……っと。

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます!』

「おはよう、織斑先生」

賑やかだった教室が一瞬で礼儀正しい軍隊整列（例え）に変わる。
私はぶっちゃけ慣れたので普通に挨拶。……だって束姉に比べたら普通だもん。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それでもないものは、まあ下着で構わんだろう」

『（いや構うだろう!）』

おそらくクラスのほとんどが心の中で叫んだと思う。もしもしー！
ここに二名ほど男子がいるんですけどー！！

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！
しかも二名です！」

「え……」

『えええええっ!?!』

爆弾が投下されて、教室内がいきなりざわつく。そりゃそうだろうね。十代女子の情報網をかくぐって転校生が来たんだから驚くよね。

「（でも二人？ 片方はフランスからの代表候補生の男子だとしても、もう一人は？」

そんなことを考えていたら教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

入って来た二人の転校性を見て、私も含めて教室内のざわめきが一気に収まる。でも驚いている相手が違う。

みんなが驚いているのはおそらく金髪の男子の方だろう。でも私は銀髪の女子の方に驚いていた。

なぜなら……

旧知の好敵手がそこにいたのだから。

s i d e o u t

第四話 再開（後書き）

最後の銀髪の少女……誰かわかりますよね？

第五話 転校生（前書き）

今回は長めです。

第五話 転校生

side 鈴音

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
金髪の転校生が挨拶して一礼した。デュノアということは、おそらくデュノア社の御子息なんだろうね。立ち居振る舞いがまさに貴公子みたいだし。と言うか笑顔が眩しすぎて直視できない。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

——」

「きゃ……」

「はい？」

あれ？　なんか既視感。

私が急いで両耳を手で塞いだ瞬間に……

『きゃああああああー……っ！』

女子の歓喜の叫びが教室内を包んだ。て言うか教室が揺れているように感じるのは気のせいかな？……よし気のせいだ。そうに違いない。絶対にそうだ。

「男子！　三人目の男子……！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

あのー、そろそろ叫ぶの止めてもらえますか。耳がそろそろ逝きそうなんですけど……

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬姐、なんでそんなに面倒くさそうなんですか？ 教員だったら私の時みたいに止めて下さいよ！

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

山田先生、お疲れ様です。

それにしてもラウラは相変わらずだね。無言で腕組しながらこっちを興味無さそうに見てたし。で、今現在千冬姐を見てる……あれ？ こっちに視線が向いた？ それで目を見開いているし……もしかして今まで私に気づいていなかったの？ なんかショック。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬姐に対して敬礼。……どんだけ尊敬しているんですか。まあ出自がアレじゃあ、当たり前かな。

それに対してされたほうは、さっきとまた違った面倒くさそうな顔になる。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

今度は背筋をぴんと伸ばして直立。おい、ラウラ。ここ軍隊じゃないよ？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。それと……」

そこまで言いかけてラウラはこちらに視線を向ける。……若干殺気を感じるし、こっちも殺気を出してもいいか。

「久しいな、篠原。首は洗っておいたか？」

「そっちこそ。腕鈍っていたら承知しないよ」

「ふ……心配ない。こちらも鍛えているつもりだ」

「そりゃ楽しみだ。学年別トーナメントで当たったら、派手にやろうか」

「ああ。そうさせて貰おう」

殺気オフット。……あれ？　なんで皆こっち向いているの？

「二人って、恋人？」

「「違う。好敵手だ」」

声が出た方に顔を向けて即刻否定する。どうやら声の発生源はのぼんさんこと、布仏本音みいだった。当の本人は体を震えさせて……って、あれ？　もしかして殺気出た？

そんなことをしていると、ラウラと一夏の目がばっちりあった。

「！　貴様が――」

その瞬間殺気を出しながら一夏に接近して……

パン！

「……………」

「う……………」

ラウラのいきなり無駄のない、しかも手加減なしの平手打ちが一夏に炸裂。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

……やっぱり一夏のこと恨んでいるんだ。しょうがないといえばしょうがないんだけど。ラウラ、千冬姐が人生の恩師だからね。過去を知っている私と千冬姐は、静かにため息を吐く。

「いきなり何しやがる！」

「ふん……………」

ラウラは一夏の発言をスルーして、空いている席に無言で座って微動だにしない。そして一方、一夏はただいま激昂中。なんか後ろに怒りの炎が見えるんですけど。

「あ……………ゴホンゴホン！ ではホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

千冬姐が手を叩いて行動を促す。一夏はさっさと更衣室へ移動開始。

「それと篠原。デュノアの面倒を見ろ」

「了解」

千冬姐の命令を頂いて、デュノア君の前までさっさと移動する。

「君が篠原君？ 初めまして。僕は――」

「あー、ストップ。自己紹介は後でしょう。とりあえずついてきて」
急いでいるのでデュノア君の手を取って、移動開始。

「男子は空いている更衣室で着替えることになっているんだ。実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてね」

「う、うん」

あれ？ なんかさつきより齒切れが悪いな。顔もなんかほんの赤いし。

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも篠原君も一緒！」

って、早速他クラス情報収集斥候部隊に発見された！？……やばいやばい、捕まったら確実に授業に遅れるし、そしたら千冬姐に殺される！！

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

ここは武家屋敷なのかな！？ なんかホラ貝の音が聞こえたんだけど！！

「篠原君の黒髪ストレートもいいけど、デュノア君の金髪もいいよね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「お母さんありがとう！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげる

ね！」

いやいや、毎年ちゃんとしたプレゼントをしなよ。て言うか、母さんが生きていることに感謝しなよ！

「な、なに？　なんでみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が私たちただだからだよ」

「……………」

え？　なんで『意味分かんない』的な顔をするわけ？…………お！　前方に開いている窓発見！　ラッキー♪

「ISを動かせる男子って、珍しくないかな？」

「あっ！　——ああ、うん。そうだね」

「それと……デュノア君、ちょっと失礼！」

「えっ？　……きゃあっ！？」

走り始めながらデュノア君をお姫様だっこする。…………おっ、意外に軽いな。

あ、ちなみに私は千冬姐くらいの身長と体重までならお姫様だっこ可能です。とゆーか、強制的に練習させられた。

「ちよっ！　いきなり喋っていると舌噛むよ！」…………えっ？」

そのままの状態で開いている窓から外に……

「きゃ…………きゃああああっ！？」

飛び出す！　そして着地の瞬間ゼロの羽を展開して着地。すぐにその羽を消して、そのまま走る。

「む：無茶苦茶なことをするね、篠原君って……」

「こんなの前まで日常茶飯事だったから楽勝だけど」

「一体どんな生活送ってたの!？」

逃亡生活。前なんて兄さんと束姉を抱えた状態で十階の高さから飛び降りたことがあったし。しかもその時ゼロが完成していなかったから、ノーロープバンジーをする破目になったんだよね……あの時はマジで死ぬかと思ったよ。

……とは、口が裂けても言えない。

「まあ、それはおいといて。これからよろしく。私は篠原鈴音。呼ぶ時は鈴音でいいからね」

「あ、うん。よろしく鈴音。僕のこともしゃるるでいいよ」

「OK。よろしく、しゃるる」

なんて会話をしているうちに、更衣室前に到着。入口に近づいた瞬間、自動ドアが開いて中に入る。そこには……

「ひゃあっ!？」

「……なんで素っ裸なの、一夏」

……素っ裸の一夏がいた。つかしゃるる。なんで黄色い声上げたの？

「いや、着替える時こうするだろ？」

「やらないよ。私の場合は中に着込んでいるから」

一発で制服のボタンを外して、上着をロッカーの中のハンガーに掛ける。ふとしゃるるの方を見ると、もう着替え完了していた。

私と同じように着込んでいたらしい。

「――よし、行こうぜ」

「OK」

「う、うん」

着替え終わったので更衣室を出る。で、一夏はグラウンドに向かう前にシャルルのISスーツを見ていた。

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオーダーメイドだよ」

「デュノア？ どこかで聞いたような・・・」

「僕の実家だよ。父が社長をしているんだ。フランスの中ではIS関連の企業で一番大きいと思う」

「へえ！ デュノアって社長の息子なのか。道理でなあ」

「うん？ 道理でって？」

「いや、なんつうか気品というか、いいところの育ちって！ って感じがするじゃん。納得したわ。」

「いいところ・・・ね」

・・・遠い目をし出したということは、触れちゃあ拙い過去なんだろうね。って、今はそんなことより・・・

「御二人さん。急がないと遅刻するよ！」

言葉と共に私は猛ダッシュ。遅れて出席簿アタックをくろうのは御免だからな。

「げっ、やばっ！ 急ぐぞデュノア！」

「う、うん！」

二人も急いで走りだす。そして、第二グラウンドに・・・

「ギリギリだぞ。次回からは早く来い」

・・・滑り込みセーフ。私は急いで列に並ぶ。・・・おろ？
セシリアが御冠だ。いったいどうs・・・って、どーせ一夏のこ
とだろうな。そこに鈴ちゃんが加わって・・・

「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

あ、馬鹿。大声なんか出したら・・・

「――安心しろ。バカは私の前にも二人いる」

バシーン！

・・・ご愁傷さま（合掌）

side out

第五話 転校生（後書き）

ラウラは知り合いです、フラグを立てるとつもりはありません。

第六話 演習

第二グラウンド

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
『はい！』

青空の下、千冬姐の号令とクラス全員の返事がグラウンドに響き渡る。

「くうっ・・・・・・・・何かというとすぐにポンポンと人の頭を・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・・・・・・」

先程千冬姐の出席簿アタックをくらったセシリアと鈴ちゃんは、未だに痛いのか頭を押さえている。

「つか鈴ちゃん？　なんで一夏の名前を呪詛のように唱えているの？　自業自得なのに・・・・・・・・あ、一夏のこと蹴った。」

「今日は戦闘を実演してもらおう。――凰！　オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

あーあ、完全にとばっちりだ。セシリア、諦めて。千冬姐に意見しても無駄だから。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが・・・・・・・・」

「一夏のせいなのになんでアタシが・・・・・・・・」

鈴ちゃん、責任転嫁はみつともないから。

「お前らすこしはやる気を出せ。——あいつにいいところを見せられるぞ？」

渋る二人に千冬姐が耳打ちする。……って、千冬姐。恋心を利用するのはどうかと……

「やはりここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

二人のやる気が急上昇……。それだったら最初からやる気を出そうよー。

あ、ちなみに今の千冬姐の言葉は完璧に聞こえていました。

「それで、相手はどちらに？ 私は鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は——」

ん？ 何この音？ どんどん大きくなってる？

「あああーっ！ ど、どいてくださいー！」

声がした方を向くと、上空から山田先生が急降下——正確には墜落していた。墜落先は……。って！ 一夏の真上！？

「って！？ うあっ！！」

ドカーン！

一夏は墜落してきた山田先生の突撃を受けて何メートルか吹っ飛ばされた。ま、展開が間に合っているから問題ないでしょう。とゆーか、なぜ墜落してきた？ 緊張？ それとも操作ミス？ 学園の先生である御方がミスするとは思えないけど……

考察しながら走って近寄るとそこには、山田先生の胸を掴んでいた一夏の姿が……よし、逃げよう。

刹那、一夏の僅か数ミリ頭上をビームが通過した。振り返ると……

「……残念です。外してしまいましたわ……」

黒い笑みを浮かべたセシリアが、青色の狙撃銃を構えていた。つか一夏殺す気か？

ガシーン！

ん？ 鈴ちゃん？ なんでその両手の双天牙月を連結させたのかな？ それを振りかぶって……一夏の首を狙って投げた！？ ちょ……おい！？ なにやって……

「はっ！」

ドンッ！×2

その時、短く発砲音が聞こえ、双天牙月は弾かれた。

その音源はなんと山田先生。上体を起こしただけの姿勢で、双天牙月の両端を的確に狙い撃ち……。あんな芸当、私にはまず無理だ。

「山田先生は元代表候補生だ。これくらいは造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに候補生止まりでしたし……………」

立ち上がり、手に持ったアサルトライフルを、肩に付いている武装コンテナに預けながら話す山田先生の雰囲気は、元の感じに戻っていた。……………しかし、まさか元候補生とはね。

「さて、さっさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で……………？」

「いや、さすがにそれは……………」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

二人は千冬姐の言葉を聞いてプライドが傷つけられたのか、瞳に闘志の炎が灯った。

でもさセシリア？ IS戦闘ド素人の一夏に負けそうになったこと忘れていない？

「では、はじめ！」

千冬姐の号令と共に三人が飛翔する。そして、ある程度上昇したところで停止した。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

山田先生の目はいつもとは似ても似付かないほど、眼光は鋭く冷静なものになっていた。先制攻撃を仕掛けたのは鈴・セシリア組だが、簡単に回避された。

「さて、今の中に……デュノア、山田先生の使っているI Sの解説をしてみせろ」

「あっ、はい。」

山田先生が使用されている……

（原作と同じなので割愛）

……知られています」

「ああ、いったんそこまででいい。……終わるぞ」

勝負は呆気なく終わった。

山田先生がセシリアを誘導して攻撃。回避したセシリアは、偶然そこにいた鈴ちゃんと衝突して動きが止まる。そこを狙って山田先生がグレネードを発射。……これで詰みだ。二人は吹っ飛ばされて、地面に大穴を空けた。

「くっ……まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてるのよ……」

「鈴さんこそ、衝撃砲をばかすかと撃つからいけないのですわ!」

「ぐぐぐぐぐ……」

「ぎぎぎぎぎ……」

犬猿の仲……いや、ただ仲が悪いだけか。

てゆーかどっちの主張も的を射ているから、余計にみつともなく見えるし。

で、そんなことをやっている間に、山田先生が下りてきた。

「これで諸君にもIS学園教員の実力が理解できただろう。以後敬意をもって接するように」

そして、山田先生の前に出た千冬姐が次の指示を飛ばす。

「専用機持ちの織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰がリーダーとなって八人グループで実習を行う。では分かれろ。あと、篠原は話がある。ついて来い」

おろ？ 一体なんだろう？

千冬姐は指示を飛ばすと、山田先生にこの場を任せてさっさと行っってしまったため、私は急いで追いかけた。で、大体五百mくらい進んだ所で歩みをとめた。

「お前、ボーデヴィツヒと知り合いだったのか？」

第六話 演習（後書き）

えー、不自然な所で切っちゃってすいません。ここで切らないと二話分になってしまうので、ここで切りました。

第七話（前書き）

今回はサブタイトル無しです。

第七話

「お前、ボーデヴィツヒと知り合いだったのか？」

「ええ、織斑先生と入れ違いで、黒ウサギ隊の世話になりました」

黒ウサギ隊。――ドイツのIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の通称で、一時期千冬姐が指導していた部隊。ちなみに隊長はラウラ。

・・・まあ、ふつーに過ごしてたらお世話にならない部隊なんだけど。だから千冬姐も「何があった？」ってジト目で見てくるわけですよ。

「イギリスから逃亡途中にプロヴィデンスと交戦してしまって、辛くも勝ったんですけど・・・代わりにゼロが大破してしまって・・・」

「プロヴィデンス？　なんだそれは？」

「ブルー・ティアーズの後継機で、秘匿された機体です。コアごと破壊したので、今はもう現存してませんが」

あの戦闘で両足と左腕が破損。人体に影響がなかったから助かったけど、よりによって材料不足でゼロは修復不可能だった。しかも、逃亡生活中の私たちに材料なんて調達出来るわけがない。・・・・ん？　亡国機業の施設から奪えばいいじゃん？　・・・あいつらは盗むだけ。施設を襲っても手に入るのは研究データだけだから意味がない。

「しかも、よりによって戦闘空域がドイツの領空内に入ってる・・・」

「それで黒ウサギ隊に拾われたのか・・・抵抗しなかったのか？」
「気絶していたから無理ですよ。それで目が覚めたら医務室にいて、すぐに事情聴取されました」

東姉と兄さんが技術提供を取りつけたから、なんとか本国に報告されずに済んだんだよね。

でも査察から逃れるためには、身分を偽装しなければならなかった。

「だから民間協力者として、黒ウサギ隊に協力することになったんです」

「それで知り合ったのか・・・だがなぜ、あのボーデヴィツヒにライバル視されているんだ？」

「・・・模擬戦で『リヴァイブ』を使って、ラウラに圧勝しちゃって・・・」

『リヴァイブ』とは、さっきシャルルが解説していたデノア社製の第二世代IS『ラファール・リヴァイブ』の略称で、装備を変えればどんな戦闘にも対応できる万能型である。ちなみにラウラとの模擬戦の時の装備は、ゼロの『エピオン』のみを装備させて使っていた。

「まあ本調子じゃなかったですし、ラウラも油断していたから勝てたんだと思うけど・・・そのせいで」

「なるほど・・・で、戦績は？」

「・・・百戦中一勝一敗九十八引き分けです」

アリスガーデンに腰を据えるまで、毎日のように模擬戦やっていたからな。あのころが懐かしいよ。

「まあ、頑張れ・・・さて、実習もそろそろ終わりか。戻

るぞ」

「了解」

「あー。・・・あんなに重いとは」

午前の実習は終了。実習で使った訓練機はIS専用カートに乗付けて片付けることになっている（ちなみに私も強制参加）。だけど、このカートの動力はなんと人。で、現在隣で馬鹿正直に人力のみでカートを押した一夏がバテてます。・・・つか

「一夏、なんで脚部にIS部分展開しなかったわけ？ そっちの方が楽でしょ」

「え？・・・ああっ!？」

「・・・え、真面目に気づいてなかったの!？ つーか「なんで教えてくれないんだよ」的な感情籠めてこっちを見ないで。気付かなかったアンタが悪い。」

「まあ、いいや。シャルル、着替えに行こうぜ」

「え、ええっと・・・僕はちよつと機体の微調整してからいくから、先に行って着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「ん？ いや、別に待ってても平気だぞ？ 俺は待つのは・・・」

グエツ!？」

「阿呆。アンタは連れがいないと着替えられないの?」

阿呆の首根っこを掴んで、更衣室に移動する。中に入って手を離したら思いっきり抗議されたけど、自業自得だと思うのは私だけであろうか。

時は進んで放課後。場所は自室。

シャルルは私と同室になった。まあ、面倒を見るように言われていたから想定の内だったけど。

で、今は食後の休憩に私が淹れた緑茶を振舞っている。

「紅茶とは随分違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「氣に行ってもらえたようで何より。今度時間があったら、抹茶でも点てようか?」

私はコーヒ―党なんだけど兄さんが日本茶好きだから、一通り淹れられるように訓練させられたんだよね。

「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよな? 特別な技能がいるって聞いたことがあるけど、鈴音は淹れるの?」

「抹茶は『点てる』だよ。まあ、兄さんが日本茶好きだったから略式でなら点てられるよ」

「ふうん。そうなんだ。じゃあ今度点ててくれる？ 一度飲んでみたかったんだ」

「OK。となると買い物が必要だね。今週末に町を案内しながら行こうか」

「本当？ ありがとう、鈴音」

柔らかい笑みを浮かべるシャルルに、同性と解っているながらもドキッてなってしまう。・・・一瞬女の子かと思った。
てゆーか・・・

「いや、いいって。私も久しぶりに抹茶を飲みたかったし、ついでだよ」

「ふふっ、ありがとう」

・・・やばい。この笑顔に母さんの面影が重なって今にも泣きそう。私はこの気持ちをかき消すように首を振って話題を変える。

「ど、どうしたの!？」

「い、いや。なんでもないよ。それよりシャワーを使う順番はどうしようか？ 私は後でいいけど」

「え、先に使いたい日とか決めなくていいの?」

「遠慮しなくていいよ。数少ない男同士だし」

「うん。ありがとう」

そしてまたあの笑顔。・・・でも、なんか違和感がある。母さんの面影と重なるけど、辛い時に無理やり笑っている時と同じ感じがする。・・・警戒しておいた方がいいな。

side out

翌日 00..01 IS学園屋上

鈴音はシャルルが寝静まったの見計らって、気配を消して誰にも見
つからずに屋上まで来ていた。

今は手すりに体を預けて、缶コーヒー片手に星空を見ている。

「（えーと、夏の大三角は・・・あ、みっけ）」

琴音と束はIS研究に熱中しているため気に留めていないが、鈴音
は逃亡生活中の楽しみが一つもなかった。そんなある日のこと、ふ
と見上げた冬の星空に心を奪われ、それ以来星空を眺めるのが好き
になってしまった。

ちなみに鈴音の熱の入りようは凄まじく、自室に天文台を作ったほ
どである。

——キイツ

突然屋上のドアが開く。

そこにいたのは水色の髪の少女——生徒会長、更識楯無であった。
鈴音はその姿を確認すると微笑みを浮かべ、ゼロに収納しておいた
缶コーヒーを投げながら話す。

「ごめんなさい。こんな時間に呼びだしてしまって」

楯無は缶コーヒ―を受け取りながら近づく。

「ふふっ、将来を誓い合った仲じゃない。お安いご用よ」

「ッ！？ ゲホッゲホッ！」

楯無の言葉に、鈴音は飲んでいたコーヒ―を氣道に入れてしまい思わず咳き込んでしまう。

「ちょっと待ってください！ いつそんなの誓いました!?!」

「あら。じゃああの日誓った言葉は嘘だったの？ 『あなたのことが欲しい』って言っていたじゃない」

「過大解釈しないで下さい！ あの時は『あなたが持っている情報が欲しい』って言ったはずですよ!?!」

顔を赤めた楯無に対して、即座に突っ込みを入れる鈴音。

彼らは三年前から顔見知りで、『亡国機業』の情報を求めるために更識家の門を鈴音が叩いたのが始まりである。更識家は対暗部用暗部の御家柄を持っているため、『亡国機業』の情報を少なからず持っていると思ったから接触したのである。

その読みは見事に当たり、以来協力関係を結んでいる。

さて、鈴音の突っ込みを受けた楯無は、何処からか扇子を取り出し、笑いながら開いた。扇子には『委細承知』と書かれている。

「あはは。分かっているわよ」

「心臓に悪いからやめてください・・・」

鈴音は内心で頭を抱え、心底疲れた表情になった。だが、二人はすぐに顔を引き締める。

「・・・さて、遊びはここまで。裏の話をしましょうか」
「はい。ではまず、こちらから・・・」

二人の会談は日の出の時刻まで続けられた。

第七話（後書き）

プロヴィデンスの姿は、SEEDのモビルスーツそのままです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4690r/>

I S ～ZEROの翼～

2011年9月20日12時36分発行